
魔法戦記リリカルなのはREIDEEN

獅子座

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのはREIDEEN

【Nコード】

N8988P

【作者名】

獅子座

【あらすじ】

11年ぶりに海鳴の地に帰ってきた柁木一真は、幼い頃に出会った少女、高町なのはと再会する。
しかし、その時から運命は動き出した

海鳴に伝わる言い伝え

街を密かに襲う災い

金色の腕輪

大いなるもの

銀色の悪鬼

幼い日の約束を胸に、少年は金色の鎧を身に纏う

夢（前書き）

C R R E I D E E Nを打って以来たぎりすぎた末の過ちです、ハ
イ。

あとがきは次回予告です

夢

夢を

遠い昔の夢を見ていました

最近は見なくなっただからすごく久しぶりに見る夢

私がまだ幼い頃の夢

お父さんが入院して

お母さんもお兄ちゃんも、お姉ちゃんも私に構ってられなくて一人
だった頃

公園で泣いていた私に手を差しのべてくれた男の子の夢

数週間という短い間、一人だった私と遊んでくれて、私を助けてく
れた男の子

引っ越してしまつて会えなくなっただけ、彼は私にとってヒーロー
みたいだった

会えなくなつて11年

貴方は、元気でしょうか？

私のことは忘れてしまつたでしょうか？

久しぶりに、貴方に会いたいです
カズくん…。

夢（後書き）

幼少期を過ごした街、海鳴市

そこに帰ってきた俺、柁木一真はある少女と再会する。

その時から、俺の運命は大きく動き出した。

次回【再会】に、フェードイン

再会（前書き）

今回は、主人公とヒロインの視点を交互にしてみました。
読みづらかったらすみません

再会

夢を

俺は夢を見ていた。

「カズくん……どこか行っちゃうの？」

遠い昔、一人で公園にいた少女と過ごした夢を

「ん。親父の都合でな」

「もう会えないの？」

その頃の俺はとても小さく、子供というものは親の都合に振り回されるのが当たり前と言ってもよくて

俺はその日、少女に別れを告げていた。

「会えないかもしれないし……もしかしたら、帰ってくるかもしれない」

「…カズくん^{カズくん}に会えなくなるの…いやだよ」

少女と初めて会った日、俺は少女の身の上話を聞いた。

父親が入院してから、母親も兄姉も自分に構ってられず、一人で泣いていたことを

あの時のような少女の泣きそうな顔を見ると、俺は小さく笑みを浮かべながら頭を撫でた

「何時になるかはわからないけど、此処に戻ってくるよ…それと」

「それと……？」

俺より少し低い少女が上目遣いで見てくるなか、頭を撫で続け

[illegible]

そうやって、俺は不器用ながらも自分の中で一番の笑顔を少女に見せた

「約束だよ？」

「約束するよ」

俺の目の前に差し出された小指に自分の小指を絡め、指切りをする
と、少女は向日葵のような笑顔を見せた。

…あの時、俺は何を約束したんだろう。
それに…君の名前は…

『次は、海鳴。海鳴です』

「…ん」

電車の車掌が目的地を告げる声で、俺は目を覚ました。
頭を振ってなかなか抜けられない眠気を取ると、リュックを持って駅のホームへと降りる。

「あれから１１年か…」

久しぶりに見るようになった夢のことを思い出しながら
俺、柁木一真は１１年ぶりに海鳴の地を踏んだ。

「高町さん…俺と付き合ってください！」

この言葉も、何度目だろう。

好きだと思ってくれる気持ちは凄く嬉しい。でも…

「ごめんなさい、他に好きな人が居るから…」

申し訳ない気持ちを抱えながら、私は目の前にいる男の子に頭を下
げた。

確か、同じ学年でも一番カッコいいってはやてちゃんが噂していた
通り、丹精な顔立ちをしている。

そのうえ、成績も運動も優秀で、ファンクラブまでいるって話だけ
ど…

「そっか…噂は本当だったか」

「噂？」

そう呟いたのを聞いて、私は男の子に問いかけた。

「うん。高町さんは昔から心に決めた人がいるって噂」

男の子の言葉を聞いて、私は少しだけ恥ずかしくなった。

アリサちゃん達に話していたのが聞こえたのか、いつの間にか学校

でも噂になってしまったらしい。

「…うん。忘れられちゃってるかもしれないけど、信じてるから」
あの日の約束

一人ぼっちだった私を救ってくれたヒーローとの約束を私は11年経った今でも信じている。

「そっか…高町さんにそんなに想われてるその人が羨ましいよ」

彼は落ち込む様子もなく、寧ろ清々しいといった笑顔で校舎に戻っていた。

「まったく、朝っぱらから砂糖を吐きなくなるわ」

「まったくや。これでなのはちゃんのフツた男の数も20人越えやな」

「にやつ?! アリサちゃんにはやてちゃん?!」

背後から聞こえた声に、私は驚きながら振り返ると、そこには私の親友であるアリサ・バニングスちゃんと八神はやてちゃんがいた。

「アンタの【カズくん】ラブもここまで来たら重症だわ」

「う…」

アリサちゃんが苦笑しながら言った言葉に私は顔を赤くした。

それもそのはず

アリサちゃんはやてちゃん

私の親友たちは私が11年前からカズくんの事が好きなことを知っているのだから。

「まあまあ、なのはちゃんを弄るのは教室でも出来るやろ? そろそろ行かな時間になってまうで?」

「それもそうね。じゃあ、教室で続きをやりましょうか」

「ちょ、二人とも待ってよ」

そういつて校舎へと歩いていく二人を私は追いかけていった。

「あ、なのはにアリサ、はやても」

「みんな、おはよう」

私たちが教室に着くと、そこには月宮すずかちゃんとフェイト・Ｔ・ハラオウンちゃんがいた。

「二人ともおはよう！」

「なのはは大変だったみたいだね」

「そうや、これで20人台に突入やで」

「も、二人とも」

二人に挨拶をすると、フェイトちゃんが小さく苦笑しながら今朝のことを言い、はやてちゃんが思い出したように再び私をからかいだす。僅かに顔を赤くしながら二人に止めてもらおうと口を出そうとした瞬間予令が鳴り、担任の先生が教室に入ってきた。

「えー…ホームルームを始める前に、まず転校生の紹介をするぞ」

先生のそんな言葉に私は小さく首を傾げた。

今は5月半ばに入った頃

転校生が来るにしては微妙な時期だ。

「それじゃ、入って来てくれ」

先生が教室の外にいるであろう転校生に声をかけると、一人の男の子が入って来た。

少しだけ赤みが入った黒髪に落ち着きのある瞳

所謂美形と呼ばれる顔立ちにクラスの女子は黄色い声をあげる。

まさか

私は、彼の顔に見覚えがあった。

とても小さい頃、私を救ってくれたヒーローに面影が似ていたのだ。私が戸惑っている間に彼が黒板に自分の名前を書く。

柁木一真

その名前を見た瞬間、頭の中で描いた【もしかして】は現実のものとなり、私は思わず【彼】の名前を呼んだ。

「カズ…くん？」

「じゃあ、俺が呼んだら入ってきてくれ」

「はい」

海鳴の駅からバスで10分ほどで編入先の聖祥大付属高校に着いた俺は、担任と学年主任に挨拶をし、今は新しく入るクラスの前に居る。

既にホームルームの時間らしく、廊下に居るのは俺以外は体調を崩して保健室に行く奴が遅刻した奴しかない。

「えー…ホームルームを始める前に、転校生の紹介をするぞ」

教室に入っていた担任の言葉に、クラスの奴らが少しだけざわついた。

それもそうだろう、5月半ばという微妙な時期に編入してくる奴が居ればざわつくのも仕方ない。

「それじゃ、入って来てくれ」

「…行きますか」

担任の言葉を聞いた俺は、小さく気を落ち着けるように溜め息を吐くと教室に入っていた。

教室に入った俺を最初に出迎えてくれたのは女子の歓声。

俺の顔立ちは所謂美形らしく、昔から告白される事は多かった

…が、それだけで、断った人数は20人以上か？

担任の横に立った俺は、背負っていたリュックを降ろすと黒板に自分の名前…柁木一真という名前を書いた。

そんな時だろう

「カズ…くん？」

小さく、それでいて懐かしさを感じる声が聞こえた

名前を書き終えた俺がクラスの奴らが座っている方を向きなると、窓際の後ろから三番目の席

そこに、夢で見た栗色の髪の少女が

時を経て、16歳になった彼女が信じられないモノを見たような表情で俺を見ていた。

「…なのは？」

隣の席に座っているフェイトちゃんが私を呼ぶけど、私はそれどころじゃなかった。

彼が

幼い頃に一人ぼっちだった私を救ってくれたカズくんが帰ってきた
それで頭がいっぱいで、気づいたら涙を流していた。

「カズくんって…もしかして、彼が？」

「…何処の恋愛小説や」

そう呟いてフェイトちゃんと、その前に座っているはやてちゃんが
カズくんを見るけど、私は彼を見ることが出来なかった。

カズくんが帰ってきたら、笑って迎えるんだと決心して11年、待
ち続けた中で我慢していたものが溢れて止まらない。

俯いて嗚咽を押し殺す私の前に彼の気配を感じた直後、頭の上に懐
かしい、暖かい感触が広がった。

「11年かかったけど…やっと約束を守れた」

抑揚のない、それでいて暖かみのある彼の声が私の耳に入ってくる。
涙を拭いて顔をあげると、彼は昔と変わらない優しい月明かりのよ
うな笑みを浮かべながら私の頭を撫で

「ただいま…なのは」

そう呟いた。

驚いた。

俺と彼女の視線が合わさって少しの時間が流れたとき、彼女が突然
涙を流し始めたのだ。

「…なのは？」

彼女の隣の席に座っている金髪の少女が名前を呼んだのに、俺は反
応した。

なのは…

…そうだ、思い出した

彼女の名前を

彼女はなのは…高町なのはだ。

「カズくんって…もしかして、彼が？」

「…何処の恋愛小説や」

先ほど彼女…なのはの名前を呼んだ少女と、その前に座っている少女の呟きが聞こえた瞬間、俺は理解した

なのはは待つていたんだ

俺が引越したあの日から11年、再び海鳴に戻ってくるという子供の口約束を信じて

何日も、何ヶ月も

11年という長い年月の間、俺が帰ってくるのを信じて待つていたんだ。

彼女が俺を覚えてくれていた事を嬉しく思う反面、待たせていた事を申し訳なく思った俺は、なのはの下へと歩いていき、11年ぶりに彼女の頭を撫でた。

「11年かかったけど…やっと約束を守れた」

頭を撫でながら呟くと、俯いて泣いていたなのはは涙を拭いて俺を見上げた。

まるで、11年前のようだと思いながら、俺はあの時の笑顔を見せてなのはに呟いた。

「ただいま…なのは」

再会（後書き）

11年ぶりに再会を果たした一魔となのは
周囲の面々にからかわれながらも、二人は日々を送る
そんな中、一真はなのは達を連れてある場所を訪れる
そこで一真達を待っているものは…

次回【邂逅】に、フェードイン

邂逅（前書き）

書いててグダグダになったなと感じてならない作者です。

さて、今回は前田崎ポジションが登場しますよ。
では、一真くんヨロシク

「何をヨロシクされるのか分からないけど……リリカルなのはREI
DEEN、フェードイン！」

邂逅

俺がなのはと再会を果たして数時間

クラス的面々になのはとの関係を聞かれて説明に困ったり、編入初日の授業で当てられたりと大変な午前中だったが、今は昼休み俺は、なのはとその友人数名と屋上に来ていた。

「でも…ホントに恋愛小説みたいだね」

「そうよね…11年前の約束を守るために戻ってくるなんて」

「ええな、ウチも一真くんみたいな人に会いたいわ」

屋上で昼食を食べていると、二人の金髪の少女…フェイト・T・ハラウンとアリサ・バニングスが俺となのはの約束について感嘆の声をあげ、関西弁の少女…八神はやてがなのはを見て羨ましそうに呟いた。

「はやてちゃん…?」

なのははまだ朝の事を引き摺ってる様子で、顔を赤くしながらはやてを睨む。

「あはは、ゴメンて」

「もう…でも」

小さく苦笑しながら謝ってきたはやてを見ると、小さく溜め息を吐いたなのはは俺を見て微笑んだ。

「おかえりなさい、カズくん」

「ああ…ただいま、なのは」

朝の時と違い、笑顔でそう言ってきたなのはに俺は笑顔を返した。…アリサとはやてが「砂糖を吐きたい」とか「唐揚げが甘い気がする」とか言っているが、気にしては敗けだろう。

「…海鳴に戻って来たのは、約束の他にもう一つ理由があるからなんだ」

「?」

昼食を食べ終え、ゴミを片付けながら俺が言うと、皆は一度手を止

めて俺の話を聞き始めた。

「一月前に親父が病気で死んでさ…その直前くらいまで、この街の伝承について調べてたんだ」

「海鳴の伝承…？」

此処に再び戻るきっかけ…親父が昔調べていた事を話すと、フェイトが小さく首を傾げる。

「あ…そういえば、昔本で読んだ事ある。たしか…」

「海鳴に災いが訪れた時、一人の神が現れて災いを祓った…」

「そうそう、そんな話やったな。でも、なんで一真くんのお父さんが？」

なのは曰く、小さい頃から本を読んでいたずかとはやてが俺の話に乗ってきた。

「親父は地方の伝承や言い伝えを専門に調べたんだ。たしか、幾つか本を出してたと思うけど…」

「…あ、もしかして…お父さんの名前って、榎木圭一さん？」

何か思い当たる節があったんだろう。さすが俺に親父の名前を聞いてきた。

「そうだよ。親父の名前は榎木圭一」

「やつぱり…」

「でも、それがなんで海鳴に戻る理由になるのよ？」

「ずかば親父が書いた本を読んだことがあるのだろう。」

しかし、話が繋がっていない事にアリサが疑問を口にする。

「ああ…実は、親父の研究に協力してた人が海鳴にいるみたいでな。今日の放課後会いに行くんだ」

「へえ…あ、私も着いていても良いかな？」

「なのはも？」

俺が放課後、親父の協力者に会いに行く話をする、なのはも着いていくと言いついてきた。

「ダメ…かな？」

上目遣いで俺を見ながら問いかけてくる

「そうだな…ちょうど道案内も頼みたかったし、俺一人で来いつて言われてもないから…頼めるか？」

「うん」

少し考えた後にそう言つと、なのはへにやりと表情を緩ませた。

「そうだ…皆はどうする？」

「私は用事があるから良いかな…」

「私とアリサちゃんは塾だから…ごめんね？」

「ウチもええかな。なのはちゃんの恋」…って、ゴメン！ゴメンて！」

俺は他の面子に問いかけるが、フェイトは用事があつて一緒に行けずアリサとすずかは塾のため同上。

はやてが何か言おうとしていたが…なのはの言い様のないプレッシャーに必死に土下座していた…結局ついてこないようで、行くのは俺となのはの二人になった。

話が決まったところでタイミングよくチャイムが鳴って昼休みはお開きとなり、俺達は再び教室に戻っていった。

「此処も変わったな」

「11年だからねえ…」

午後の授業が終わって放課後になり、私とカズくんは海鳴歴史史料館に向かっていた。

カズくんと今日会う人はそこで待ち合わせをしているらしい。

…カズくんと、こうして歩きながら考えたんだけど…

(これって…なんだかデートみたい…)

道案内と付き添いだからあまりムードはないけど、二人で歩いていると、そう思ってしまう。

いつかは…カズくんと、ちゃんとデートしたいな…

「なのは、このあたりだよな？」

「ふえ?! あ、うん…たしか…ホラ、あそこだよ」

カズくんの言葉に我に還った私は、先ほどの思考を振り払って史料館を指差す。

カズくんのお父さんを手伝ってた人か…どんな人だろ？

「カズくん…カズくんのお父さんを手伝ってた人って、どんな人？」

「ああ…たしか、俺と同じ年で考古学に詳しい人って聞いたし、写真で見たな…あ、彼だよ」

「？…え」

カズくんに聞いてみると、記憶を辿りながら説明をしてくれて、その人であろう人を指差したが…私はその人を見て呆然としてしまった。

何故なら、その人は私が…うつん、私やフェイトちゃん達がよく知ってる人物だったから

「ユーノ・スクライア…彼が、親父の研究に協力してた人だよ」

僕、ユーノ・スクライアは海鳴歴史史料館の前である人と待ち合わせをしていた。

その人の名前は柁木一真

民俗学を調べていた柁木圭一教授の息子さんで、僕と同じ年。

柁木教授と知り合ったのは、僕が海鳴に来ていたある日、すずかに勧められた教授の著書を図書館に返しに行く道中だ。

図書館に行ってる途中、教授から海鳴の伝承について分かる場所を尋ねられたのが最初

もしかしたらと思って声をかけてみると、彼は少し恥ずかしそうに認めていた。

それから、僕は教授に頼んで研究の手伝いを始めたんだ。

彼の著書を読んで感じた事で、彼と関わって強く思った事は、教授は夢を追い求める少年のような人…いや、【ような】ではない

彼は少年がそのまま大人になったといった表現が一番似合っていた。教授と僕が最後に会った日、教授は僕にある物を渡してきた。

「俺が死んだら、息子に渡してほしい」と言つて渡されたものを、今日一真に渡す。

一真とは教授の訃報の連絡を受けて以来、度々連絡をしていて、今では友人と呼べる仲になっている。

一番最近の電話で、僕に会いに来るだけでなく、11年ぶりに海鳴に帰ってくるという話もした。

それと同時に、その話を聞いて、僕の中である話が繋がりがけていた思い出すのは、幼い頃になのはから聞いた【カズくん】の話。

もしかしたら、一真が

なのはの話していたカズくんかもしれない

そう、心の何処かで確信していたんだ。

なのはから何度も話を聞いて、たまに他の話はないものかと思つたりもしたけど

もし、僕の予想が当たつていれば

なのはとカズくん…一真には再会してほしいと強く願つた

…ふと、史料館からそんなに離れてない道を見ると、一組の男女が歩いてきていた。

一人は、僕の友人である柁木一真。

そして、もう一人は…

（良かったね、なのは）

再会する事を信じて待ち続け、僕も願つた少女

高町なのはが、そこにいた。

ユーノと待ち合わせた俺となのはは、史料館から15分ほど歩いた先の喫茶店【翠屋】に来ていた。

翠屋に着いた俺は、二つの事で驚いた。一つは、なのはと待ち合わせしていた親父の協力者であり友人のユーノが友達ということ

もう一つは、ユーノは俺が【カズくん】だと知っていた…というか、予想していた事だ

二つ目の事を言われたなのはは今、俺の隣で顔を真っ赤にして俯い

てる。

「…さて、そろそろ本題に入ろうか」

俯いてるなのは見て微笑んでいたユーノは、俺を見てきた

「だな。それで…親父が俺に渡してほしいって預けた物って何なんだ？」

「僕は預かっただけで、中身は見えないよ。一真がちゃんと確認してからって決めてたし」俺がユーノに尋ねると、そんなことを言いながらユーノは俺にアタッシュケースを渡してきた。

ケースを受け取った俺は、全員に見えるように開けた。

「コレは…」

ケースを開けて中を覗き込んだ三人の中で、最初に俺が口を開いた。

「腕輪…だね」

「そうだね…」

続いて、なのはとユーノが呟く。

なのはが言ったとおり、ケースの中には金色に輝く腕輪が入っていた。

大きさはだいたい成人男性の手首のサイズで、表面には紋様のような彫刻が施されている。

「…あれ？裏側にも何かある…」

「裏側？…あ、本当だ」

三人で腕輪を眺めていると、なのはが裏側にあるものに気づき、ユーノが腕輪を手にとって裏側を確認する。

「なんだろう…僕が知ってるどの文明でも使われてない字だ…」

裏側に刻まれているものは文字らしく、向かい側の俺からも少しだけ見える。

どうやら、考古学に詳しいユーノにも読めないらしい

「ユーノ君にも読めないなんて…」

ユーノの言葉を聞いて、なのはも驚きを隠せないでいる

「あれ？」

「……『大いなるもの』」

「「え？」」

「ここ…何となく、そう読める気がする」

俺の呟きに疑問の声をあげた二人に、指を指して読める気がする場所を指差した。

「一真、それは本当？」

「何となく、だけどな」

ユーノが驚いた様子で俺に尋ねてくるが、確証を持ってない俺は曖昧に返事を返せないでいた。

「…一真、僕は今の状況に対して疑問に感じたことがあるんだ」
「疑問？」

俺の話を聞いていたユーノは少しだけ考えてぽつりと呟き、その言葉に俺は問いかけた。

「うん…今になって思ったんだけど、今日までの事は…何か、都合よく動いてる気がするんだ」

「…どういう事だ？」

「一真、君はどうして海鳴に帰ってきた？」

ユーノの言葉を俺は理解できないでいた。

今までの事が都合よく動いてるって…親父が死んだ事や、俺が海鳴に帰ってきた事が？

それに…なんで海鳴に帰ってきたかって…

「ユーノが親父から預かったものを受け取るためだ…なのはとの約束を守るためだろ」

「そこだよ。教授が僕にこの腕輪を渡して、それを受け取るために戻ってきた…そこが疑問なんだ」

「…確かに」

ユーノの言葉を聞いて、やっと俺も疑問を感じた。

海鳴の伝承を調べていた親父が、それに関係するだろう物を見つけたとしたら…学者として、腕輪の事を発表したりする筈だ…なんで親父はそれをせずに、わざわざ俺に渡してほしいとユーノに預けた？

「個人的な推測だけど…この腕輪と一真が帰ってきたこと…何か、

繋がりがあのように思えるんだ」

「まさか…そんなオカルトみたいな事があるか？」

「僕もなんて言えば良いか分からないけど…そう思えて仕方ない」
そう言いながら、ユーノは俺に腕輪を渡してきた。

ユーノは大切な友人だ

だが、流石に確証のない推測を簡単に信じるのは難しい

そう思いながら腕輪に触れた瞬間、俺の頭の中に幾つかの映像が駆け抜けた。

大空を翔る鳥

剣を振るい、弓をつがえる姿

鬼に似た容姿のナニカ

そして…

黄金の鎧を身に纏った神

「…っ！」

「…カズくん、どうしたの？」

「一真？」

一瞬のうちに起きた出来事に、俺は汗をかき、息を荒くしていた。
なのはとユーノは、俺の様子を心配そうに見ている。

…今のは、いったい…

「…大丈夫だ、なんでもないよ」

「…無理しないでね？」

「ありがとう…」

二人に心配をかけないよう、汗を拭って言うと、なのはは未だ心配そうに俺を見てきた。

「…一真の事もあるし、あまり夜に出歩くのも悪い。二人とも、そろそろ帰ろう」

心配そうに俺を見ていたユーノは時計を見ると俺達にそう言ってきた時間はいつの間にか8時前

俺はともかく、なのはを夜遅くに出歩かせる訳にもいかず、俺達は翠屋を出た。

「良いのか？あの喫茶店、なのはの両親が経営してるんだろ？」

「うん。今は、カズくんが心配だから」

翠屋から家に帰る道、俺となのはは帰る道が同じということで一緒に帰っていた。

その時に、翠屋はなのはの両親が経営している事を知った俺は、両親と帰る事を勧めたが、なのはが頑として譲らなかった結果、この状況である。「あ、そうだ…カズくん」

「？」

「約束…覚えてる？」

なのはは、ふと思い出したように俺の数歩前に来ると、俺の方を向いて聞いてきた。

約束って…たしか

「なのはと再会する…って約束か？」

「それもだけど…もう一つしてたよ？」

俺が質問に答えると、なのはは右手人差し指を立てて俺を見てくる。もう一つの約束…

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

あの時の夢で、俺がなのはに言った事だと解ったが…俺は、あの時何を約束したんだろう

「ゴメン、約束したのは覚えてるけど…内容を忘れちゃったみたいだ」

「そっか…」

忘れてしまった事を凄く、申し訳なく思いながら謝ると、なのはは少し…ほんの少しだけ寂しそうな表情を見せた。

「でも…」

「？」

「ちゃんと思いつから。俺がした約束だし…思い出せないのは、俺自身嫌だしな」

何故だろうか…なのはが寂しそうにしていたり、悲しそうにしているのを俺は見たくない。

そう思っていると、自然と口が動いていた。

「うん！」

俺の言葉を聞いたなのは、教室でみせた向日葵のような笑顔で頷き、俺の前に右手小指を立ててきた。

「約束だよ？」

「わかった…約束だ」

上目遣いで尋ねてくるのはを見ると、俺は笑みを浮かべて自分の右手小指を絡めた。

11年前のあの日のように

邂逅（後書き）

なのはとの再会

ユーノ、腕輪との邂逅を終えた一真は夢を見る。

金色に輝く神の夢を

穏やかに過ごす一真達の陰で

ソレは密かに動き出した

次回【異変】に、フェードイン

2000アクセス記念企画（前書き）

主人公のプロフィール、緊急アンケートを兼ねた内容です
ぶっちゃけ、かなりグダグダな上にセリフがほとんどという有り様
orz

小説とか読んで勉強していきますので、皆様お付き合いください。
では、一真、なのはヨロシク

「リリカルなのはREIDEEN、フェードイン！」

あ、あとがきにもちよつとしたネタバレあります

2000アクセス記念企画

海鳴市のあるラジオ局

その中のスタジオに、二人の青年と一人の少女がいた。

一人の年の頃は20代前半

僅かに赤みの入った黒髪を無造作に伸ばし、赤いフード付きのトレーナーにジーンズといったラフな格好をしている。

その向かいには、10代半ばの男女の姿が

「さて始めました、特別企画！と言うことで、本日のパーソナリティを務める作者の獅子座です。そして…」

「どうも、アシスタントの榎木一真です」

「同じく、高町なのはです」

作者…獅子座の向かいに座っているのは、本編の主人公である榎木一真と、ヒロインの高町なのはだった。

「でも、なんで俺達はこんな場所に？」

「うん。緊急招集ってメールが来たから何かあるとは思ってるけど…」

「まあ、気になるのも無理ないわな。とりあえず、コレを見てくれないや」

一真となのはの疑問を聞くと、獅子座はおもむろにジーンズのポケットから携帯電話を取り出す。

「携帯…？」

「だね…しかも、凄いボロボロ…何年使ったんですか？」
「2年」

「…え？」

「いや、だから2年だって」

「…いや、2年で携帯はここまでボロボロにならないだろ」

「そうですね…塗装も剥げて、傷だらけなのに2年しか使っていないなんて」

「落として蹴って…んな事があると、2年でもボロボロになる…いや、そうじゃなくて」2年しか使ってないのにボロボロな有り様の携帯を見た一真となのはによって話が脱線しかけ、携帯を操作すると、再度二人に見せる。

「これは…この作品を載せていただいてるサイトだな…これが何か？」

「まあ、見てみ」

「あ、作品のアクセス履歴ですね…え」

二人に見せたものは、サイト…【リリカルなのはREIDEEN】を載せていただいているサイトらしい。

内容をいまいち理解できない一真が獅子座に問いかける傍らで、なのははあることに気づいたらしい。

「どうした？」

「2000アクセス越え…500ユニーク越えだって」

「そ。今回は2000アクセス、500ユニーク越え記念って事で招集したわけ」

「したわけって…いったい何をするんだよ」

「まあ、一真と他のキャラの紹介、これからの事に関する少々のネタバレとアンケートかな」

「アンケート？」

「順を追って説明するから、二人は手元のプリントを交互に読んでくれ」

「わかりました…えっと、【REIDEEN】との相違点？」

「オリジナルのREIDEENとなのはとクロスさせた本作の違いだな。一真、読んでくれ」

「ああ…【舞台は立国市ではなく海鳴市】」

「リリカルなのはとのクロスだからな。次、なのは」

「あ、はい…【ライディーンは巨人ではありません】？」「オリジナルのREIDEENでは、ライディーンは古代に造られた巨大ロボットって設定だったけど、クロスさせるにあたって鎧に変えまし

た。ガディオンも同様」

「流れからして、次は俺か…【巨獣機、侵略者は登場しません】」

「出現させるのは可能かもしれないけど、難しそうだから代わりを用意します。ちなみに、碧野も出ませんよ？」

「次は…【自警隊も出ません】」

「迅雷や疾風も出したかったけど、代わりの組織として時空監理局…アースチームを絡ませます。あ、監理局で造られた無人魔動兵器って設定で出せるかな…」

「自分の首を絞めそうだな…」

「まあ、なんとかならあね。以上が相違点かな」

「これからの展開をどうするか、それは獅子座の腕次第か」

「読者の方々に楽しんでいただける作品にしたいな…さて、次は一真のプロフィールと各キャラクターの紹介だな」

「本作と原作での違いとか紹介するんですね？」

「そゆこと。では、まずは一真から」

榎木一真（16）

I v . 保志総一郎

聖祥大付属高校二年生

身長 168cm

体重 56kg

少し赤みの入った黒髪に目鼻の整った顔立ちをした少年

5歳の頃、一人で公園にいたなのはと出会い、友達になる。

数週間という短い間、一人ぼっちだったなのはと交流を深め、なのはにとって大きな心の支え

以降のなのはの人格形成に影響を与える

民俗学者の父、榎木圭一についていく形で海鳴を離れる際、なのはと二つの約束を交わす。

一つは

【海鳴市に戻り、なのはと再会する】

二つ目は一真自身忘れていたが、後の話で明らかに。

11年の歳月が流れ、16歳になった一真は病死した父の遺品を受け取り、なのはとの約束を守るために海鳴市へ戻ってくる。

なのはとの再会の後、父の遺品を預かっている少年、ユーノ・スクライアと会い、ライディーンの腕輪との邂逅を果たす。

「以上が現時点での俺のプロフィールか」

「付け加えるなら、なのはの婿だね」

「し、獅子座さん!」

「さ、それはともかく顔を赤くしてるなのはのプロフィールでもいってみるか」

「全文入ると長いぞ?」

「所々省略するよ。知ってる人は知ってるし」

高町なのは(16)

一真の嫁

皆様ご存知の白い魔王様

今までの経歴は変わらないが、一真の介入により、一人でいる事の寂しさを知っていることに加え、誰かの支えになりたいと願うようになる。

一真と初めて出会い、友達になった頃から一真一筋であり、一真が引越す際に交わした約束を11年信じて待ち続ける健気さを持つ。小さな頃から一真の事をカズくんと呼び、今も変わらず呼び続けている。

周りに言っていないが、将来の夢は一真に嫁ぐ事だが、幼なじみの面々は既に知っている。

「以上が、なのはの大きな違いかな」

「…大丈夫か？なのは」

「あう…／＼」

「二人とも初心いなあ…あ、フェイトたちはともかく、ユーノも大きな違いがあるんだ」

「そうなのか？」

「おう、ちなみにこちら」

ユーノ・スクライア（16）

前田崎 太郎ポジション

幼い頃の経歴は変わらないが、13歳の頃に一真の父、榎木圭一と出会い、彼の研究

【海鳴市に伝わる伝承】

を調べる手伝いをしていた。

一真とは、ユーノが圭一と最後に会った一年後、15歳の頃で、計報を一真が連絡したことが切っ掛けで知り合い、今では互いに友人と呼べる仲

最後に会った日、一真に渡してほしいとアタツシukeースを預かり、一真が海鳴市に帰って来た日に一真、なのはと共にライディーンの腕輪との邂逅を果たす。

以降の話では、ライディーンに関する伝承の調査、神代文字の解読などに尽力、一真やなのはのサポートに回る。

「以上がユーノの本作での大きな違いだ」

「…名前、区切ったな」

「じゃないと、崎太郎とか呼ぶ人居そうだし」

「…／＼」

「なのはー、帰ってこーい」

「…返事がないな」

「ただのしかばねのようだ…ってか？まあ、良いとして…あとはア

ンケートだな」

「アンケートって…どんなアンケートなんだ？」

「それなんだけど…ライディーンに関してな」

「？」

「ライディーンを鎧として出すとして、初めから全身に鎧を纏わせるか、段階的に纏わせるかで迷ってたんだよ」

「段階的に？」

「そ。鍛えて、ライディーンに認められて鎧を段階的に纏っていくか、初めの覚醒から鎧を全身に纏うかな」

「ふむ…」

「ということで、読者の方々に意見を聞きたいと思って」

「なるほどね…締め切りは？」

「一週間以内で多かったプランを採用するかな」

「そうか…意見が集まると良いな」

「切に願うよ…さて、今回はこの辺りにするか」

「今回はセリフ多めだったな」

「つか、10割中9割9分セリフだよ」

「まだまだ未熟、だな」

「これから頑張っていくです…では、お相手は獅子座と」

「柎木一真と」

「高町なのはでした…／／」

「あ、復活した」

緊急アンケート

以降の話で、一真がライディーンの力を使うにあたってのアンケートを実施します。

AかB、いずれかでお答えください。

締め切りは2／1です

A・最初の覚醒からライディーンの鎧を全身に装着

B・一真が鍛え、ライディーンに認められてから装着される鎧のパーツが増える

以上から選んでください

皆様からのご意見、ご感想お待ちしております。

2000アクセス記念企画（後書き）

はい、お付き合いありがとうございました。

ここで、更なるネタバレといきます

主人公【**榎木一真**】の名前の由来は、なのはのカズくんという呼び方から予想していた方も多かったハズ

スクライドのカズマから名前をいただきました。

よって、E.V. イメージボイスも保志氏を選んだ訳です。

ちなみに、父親の圭一も保志氏が担当していた【ひぐらしのなく頃に】主人公、前原圭一からいただきました。

名字の【**榎木**】は、小さい頃に好きだった漫画【**天地無用！**】の榎木天地より拝借を

しかし、今回ののは非常にグダグダだった。

如何に修行が足りなかったかを思い知らされました。

次回からは、より一層頑張っていきますので、よろしく願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8988p/>

魔法戦記リリカルなのはREIDEEN

2011年10月6日22時29分発行